

5-3 ドラムについて



ドラムはなかなか電氣化されにくい楽器だ。ポップスやロックではギターもベースもピアノも普通はエレクトリックで、生楽器の場合はわざわざ「生」や「アコースティック」を付けて呼ぶのに、ドラムといったら通常は「生」ドラムのことを指すのだ。「生ドラム」っていった場合は楽器の分類ではなくて、打ち込みによる音源のドラムに対して、人間が演奏するドラムという意味で使われる。

そもそも「ドラム」というのは「太鼓」という意味で一つの楽器を指すのだが、通常「ドラム」いったときには複数の太鼓、つまりドラム (=Drums) と複数のシンバル (=Cymbals) の組み合わせのことをいう。英語でも Drums と言えばシンバルも含んだセットのことだ。(他に鶏肉の手羽元も drum というが ...) ドラムは、個人の好みでどんな組み合わせをしてもいいんだけど、よっぽど特殊なものを除いて必ず必要なのがバスドラムとスネアドラムとハイハットで、あとはそれにいろいろなものを組み合わせてドラムセットにするわけだ。タムは数が増えると楽器自体のチューニングもマイキングも難しくなるので、あんまり使わないのならちょっとぐらい我慢してセットから外してほしいというのがエンジニアの本音。



演奏者側から見た一般的なドラムセット

う高い位置にセットしたためハイ（高い）という言葉が付いている。ハットはその形状からだろう。

ほとんどが14インチのシンバルの2枚の組み合わせで、ロック系で15インチ、スムーズジャズなどでは13インチのものも使用される。基本的に打面側（トップ）より下側（ボトム）の方を厚くしたほうがハイハットの「チキチキ」という音を出しやすいので、セットではその組み合わせで売られている。ペダルを踏む強さでタイト・ルーズ・ハーフオープン・フルオープンと音色を変化させることができ、さらにオープン・クローズの音色変化をリズムの中に取り入れることによって、ドラムの表現力を豊かにしている。

シンバル2枚が離れた状態（オープン）から合わせた状態（クローズ）にするときには、2枚のシンバルをともに垂直に合わせるとシンバルの中側の空気の逃げ道がなく、音抜けが悪くなってしまうことから、ハイハットスタンドにはボトム側のシンバルに傾斜を付けるためのネジが付いている。これによってボトムのシンバルが少し斜めになって、クローズにしたときに空気の逃げ道ができるわけだ。ただしあまり傾斜を付けすぎると、トップとボトムのシンバルがすぐ触れてしまい、音の変化が乏しくなってしまう。



またハイハットの中にはパイステのサウンドエッジのように、ボトム側のシンバルをわざと波打たせたり、ジルジャンのクイックビートのようにボトム側に小さな空気穴を4つ開けたりしてさらに抜けの良さを追求したセットもあるが、音が軽くなりすぎる傾向があってそれほど一般的ではない。



パイステ
サウンドエッジ (左)

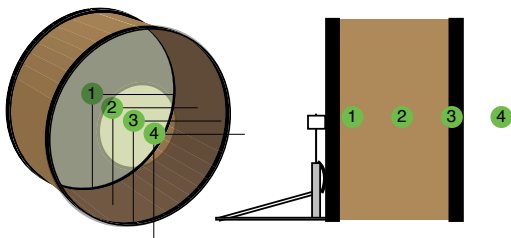
ジルジャン
クイックビート (右)

シンバル

ドラムセットで使われるシンバルは、オーケストラで使う手持ちのシンバルと構造的に変わりはないけど、2枚をたたき合わせる方法ではなく、1枚ずつシンバルスタンドに立てて主にスティックで叩く。ドラムセットの中で使われるシンバルには大きく3つにわけられる。(写真はパイステの2002シリーズ。写真提供 PAiSTE)

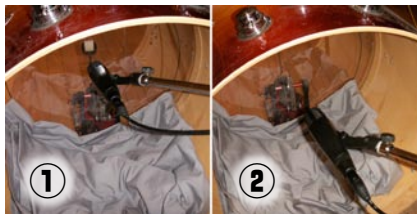
バスドラムのマイキング

マイキングの基本的な考え方は通常穴の開いている前面から打面ヘッドの中心を狙う訳なんだけど、その位置は図のように4パターンほどに分けられる。



普通に考えれば近接効果の影響で①の位置がもっとも低音が出てクリアな音になるはずなんだが、実際には③近辺を狙う事が多い。なぜかという、マイクの近接効果の他に、胴中の響き・前面のヘッドの

音・マイキングの物理的な問題などがからんでくるからだ。



試しに表のヘッドを取り払った状態で、①②③④の音を比較すると、①はパチッというアタック音が強調されるもののあまり低域は入ってこない。これは近接効果が「比較的小さな音源」に対して起きるもので、キックのような範囲の広い音源では起きづらいのと、胴の中で反射した音がマイクに入りにくいからだ。

サウンドサンプルではぱっと聞き低音が強く聞こえるがこれはマイクが吹かれた音で気持ちよい音とはいえない。



②のマイキングはヘッドに近すぎず遠すぎずアタックも不足しない上に胴鳴りも録れるので録音などでは一番いいポジションといえるが、PA では胴鳴りの部分が強すぎて芯がない音になる可能性もある。



③のマイキングはあっさり目。胴の音も拾うものの②ほどではないので、低域をコントロールしたい場合によい。④まで離してしまうと音量も落ちるので、音的に悪いと言うほどではないにしろ、積極的に使うようなマイキングではない。





SM81

コンデンサらしさを感じさせつつ、おとなしい音が録れる。上品な音だが、パワー不足を感じることも…



C 414 B-XLS

C 414 B-ULS よりこちらの方があっさり風味なので、ハイハットにはあう。C 451 B の紙っぽいサウンドが嫌いな場合にはこちらがおすすめだが、やはりラージダイアフラムのマイクはセッティングも音も使いにくい。



U 87Ai

ラージダイアフラムのマイクは一般的にその特性の素直さから、「ハイハットってこんな音も出ていたんだ」と感じさせてくれるのだが、残念ながらその音は不要な音であることが多いので、セッティングに苦労する割には報われない。よってあえて U 87Ai を苦労して立てる意味はない。



C02

C 451 B より下の方にピークがあり、さらに高域全体が持ち上がっているサウンドで、もともと EQ をしたような音。この音が嫌いであれば使えるマイクだが、嫌いならガラガラするだけの音とも言える。



C2

ダイナミックとコンデンサの中間のような音。嫌みな音ではないが、超高域のニュアンスは足りない。